

初級教材における使役の 「偏り」と使用実態

岩田 一成

◆要旨

初級教材における使役の扱いについてその練習問題に注目してみると、多くが被使役者の格表示練習（ヲ格使役・ニ格使役の区別）に特化していることがわかる。また無生物使役を扱っている教材はない。ところが実際に母語話者会話コーパスを調べてみると被使役者のヲ格ニ格の表示は21%に過ぎず、ほとんど被使役者は表示されないことがわかる。またヲ格使役は半数以上が無生物使役であることを考慮すると、教科書の扱いは明らかに言語の使用実態と合っていないことになる。参考に学習者コーパスも見てみると、学習者のレベルが上がるにつれて、被使役者のヲ格ニ格表示割合が減っていくことがわかった。また、中上級の学習者は使役使用で誤用が多い（38%）ことも確認した。

◆キーワード

日本語教育文法、教科書分析、被使役者の格表示、心理動詞、会話コーパス

◆ABSTRACT

This paper points out that the actual use of Japanese causative construction has not been reflected in basic Japanese textbooks. According to conversational corpus research only 21% of the causees in causative construction are expressed by case particles 'ni' and 'o'. I also show that in actual use 'o' is basically used to indicate an inanimate causee, like "noo o hatarakaseru (make brain work)". However, most basic Japanese textbooks focus on distinguishing the case particle 'ni' from 'o' for animate causees like "kodomo o arukaseru (make child walk)/kodomo-nigohan o tabesaseru (make child eat meal)".

◆KEY WORDS

the pedagogical Japanese grammar, basic Japanese textbook, causative construction, causee, psychological verb, conversational corpus

The Use of Causative Constructions in Conversational Corpus and Inquiry into Basic Japanese Textbooks

KAZUNARI IWATA

1 はじめに

日本語教育の初級について概観すると、そのシラバスが多くの教材で共通している。数量詞をテーマにした岩田(2011)では教材の中でも練習問題(以後「ドリル」と呼ぶ)に注目することで、その共通点を指摘している。それぞれの課には、指導すべき文法項目が設定されており、そのどこに注目してドリルとして提示するかは、多くの教材が共通している。これらの共通点は、当該文法項目の体系性を網羅するため、形式をわかりやすく整理するためといった理由で採用されており、必ずしも実際の言語使用実態と一致するわけではない。こういった背景からこれらの共通点を「使用実態とずれている可能性がある」というニュアンスを込めて、「偏り」と呼びたい。

本稿は、日本語教育文法研究の一環であり、日本語教育に直接貢献できる文法研究を目指している。具体的には教科書分析を基に研究課題を立て、それをコーパスで検証するというアプローチを取る。野田(編)(2005)で、技能別の日本語教育文法というものがあるが、本稿は「聞く」「話す」といった口頭コミュニケーションに絞る。また、テーマは使役とするが、先行研究には高橋・白川(2006)がある。

2 使役について

2.1 用語の解説と使役の分類

本稿では(1ab)における‘母’の位置にくる名詞を使役者、‘子供’の位置にくる名詞を被使役者と呼び、abをそれぞれヲ格使役・ニ格使役と呼ぶ。

- (1) a. 母が子供を歩かせる
- b. 母が子供に牛乳を飲ませる

また、(1ab)は強制的に‘歩かせ’たり、‘飲ませ’たりすることもあれば、

子供の意志を許容する場合もある。両者を区別して議論する際は、前者を強制使役、後者を許容使役と呼ぶ。さらに森田(1995)では、以下のような例を出して、日本語では「自然に」「本能的に」「条件反射的に」という状況で使役が使われるとしている。

- (2) あまりの素晴らしさに私たちがうっとりさせる。

他にも「思い出させる」「はらはらさせる」「奮い立たせる」という例なども挙げられているこのタイプを、誘発使役と呼ぶ。本稿ではデータ分類の便宜上、特に人の感情・気持ちに関わる心理動詞が用いられている使役についてのみこのタイプに分類する。この使役は被使役者が無意識のうちに心理変化がおこる点・使役者が命じて働きかけるわけではない点が強制使役・許容使役とは異なる。上の例では、被使役者が「うっとりしよう」と思ったわけでもないし、使役者が「うっとりしろ！」と命じたわけでもない。

使役研究においてはここまでの例のように、人(生物)に対する働きかけ表現が中心に扱われてきている。ただし、「雨を降らせる」のように、対応する他動詞がない場合に自動詞の使役を使って補われる点はすでに寺村(1982)で指摘されており、本稿もこれにならう^[註1]。つまり、無生物が被使役者になっているものも使役の用例として収集する。前者を生物使役、後者を無生物使役と呼んで区別する。

2.2 誘発使役と無生物使役

誘発使役という名前は定着している呼び方ではなく、日本語学において活発な議論がなされているとは言い難い。しかし、心理動詞を用いる表現という視点で、英語と比較対照してみると、日本語の特徴が明らかになる(板東・松村2001)。英語では主語に原因や動作主を、目的語に経験者を取る心理動詞がたくさんあり、「The present pleased the children」のような原因を主語に立てた表現を日本語で言おうとすると「プレゼントが子供たちを喜ばせた」のように心理動詞を使役にしなければならない。これは日本語の心理動詞が基本的に自動詞の形態を取っているために起こる構造的な現象である。つまり原因や動作主が

経験者の心理に変化を起こしたという事態把握をしたい場合は、日本語は使役を使わざるをえないのである（「驚かせる、失望させる、笑わせる、安心させる……」）。

以上の議論をまとめると、誘発使役と本稿で呼んでいるものは、対応する他動詞がないために自動詞の使役を使っているということになり、2.1で述べた無生物使役との共通点が見えてくる。他にも無生物使役は被使役者が無意識である点（無生物であるから当然「～しよう」と思えないということ）、使役者が命じて働きかけるわけではない点（「～しろ！」と命令するわけでもない）、誘発使役と無生物使役は連続している^[註2]。また両者は、被使役者の格助詞にヲ格しか取れないので（寺村1982）、他の使役とは異なり、他動詞に近い特徴を持つ。ここまでの議論を以下の表にまとめる。

(3) 使役諸用法の整理と連続性

生物使役	強制使役	被使役者の表示によって、ヲ格使役・ニ格使役に分けられる
	許容使役	
	誘発使役	被使役者の表示はヲ格使役のみ可能
無生物使役	無生物使役	

3 教材分析

3.1 分析対象となる教材

岩田（2011）では教材分析を行っている研究の被採用率を基に将来の展開も踏まえ、10の初級教材を提示しており、本稿もそれにならう。

(4) 分析対象の教材：[] 表示は以後の議論で用いる短縮呼称^[註3]

『みんなの日本語』スリーエーネットワーク（1998）[みんな]
 『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』つくばランゲージグループ（1991）[SFJ]
 『JAPANESE FOR BUSY PEOPLE』AJALT（1989）[JBP]
 『初級日本語 げんき』ジャパントイムズ（1999）[げんき]

『日本語初歩』国際交流基金（1981）[初歩]
 『新文化初級日本語』文化外国語専門学校（1989）[新文化]
 『初級日本語』東京外国語大学留学生日本語教育センター（1990）[初日]
 『語学留学生のための日本語』凡人社（2008）[語学留]
 『JAPANESE FOR EVERYONE』学習研究社（1990）[JE]
 『大地』スリーエーネットワーク（2009）[大地]

3.2 使役の「偏り」

各教科書で一致しているのは、すべてのドリルは生物使役だけを対象にしている点である。その中でも強制使役を中心に扱っており、必ずドリルでも最初に出てくる。また、誘発使役をドリルに意図的に組み込んでいるものは[SFJ][初歩][初日][語学留]のみである^[註4]。

各教科書における使役ドリルの形式に注目すると、多く採用されているのが以下のような例であることがわかる。動詞の変化に加え、自動詞・他動詞の違いによって被使役者の格助詞がヲ格になるかニ格になるかを練習させるものである。

(5) 使役のドリル例

例のように文を作りなさい。

- a 子どもが買物に行く → 子どもを買物に行かせる。
1. 子どもがうちに帰る
 2. 両親がびっくりする
 3. みんながよろこぶ
 4. ガールフレンドが泣く
 5. 先生が困る
 6. 友だちが怒る
- b むすこが車を洗う → むすこに車を洗わせる。
1. 子どもがごみをすてる
 2. 学生が答えを言う
 3. 弟が仕事を手伝う
 4. むすめがピアノを習う
 5. 赤ちゃんがミルクを飲む
 6. コンピュータがデータを計算する

[SFJ] Vol.3 drills : 124]

このタイプは、上記[SFJ]だけでなく、[みんな][初歩][初日][語学留][新文化]が採用しており、使役の定番ドリルといってもいいだろう。[大地]は

ドリルにおいて被使役者をわざわざ言わせない^[註5]が、練習を2種類に分けて、ヲ格・ニ格の区別を明示的にしている点で他と共通している。

[JBP] [JE] は、ヲ格・ニ格の区別は説明するものの被使役者の表示を練習させたりはしない。[げんき] は被使役者をすべてニ格で統一してその使い分けドリルはしない。つまり [げんき] 以外は、何らかの形で被使役者の格表示を明示的に伝えようとしている。多くの教材で被使役者の格表示に焦点を絞りドリルが組まれていることがわかる。

3.3 本研究の目的

ここまで見てきたように、教材分析をしてみると使役のドリルは、自動詞・他動詞によって被使役者（人間）の格表示が変わるという点に注目するという「偏り」を有していた。ここから以下の研究課題を提示したい。これらの課題を検証していくことが本研究の目的である。

- ①日本語母語話者データでは、被使役者をヲ格・ニ格でどの程度表しているのか
- ②被使役者のヲ格・ニ格を、日本語母語話者は自動詞・他動詞の区別によって使い分けしているのか
- ③日本語母語者と日本語学習者の使役使用実態に相違点は見られるのか

高橋・白川（2006）も用例を分析した上で、使役全般に関して初級指導への提言を行っているが、本稿は使役の中でも被使役者の格表示に特化して議論を行おうとしている点、より大きな会話コーパスを使っている点が異なる。

4 コーパス分析

例文採集は、文字列検索ソフト JGREP^[註6] で正規表現（[かがさたなばまらわ]せ）を用いて‘せる’‘させる’という形式をすべて抜き出した。使用コーパスは日本語母語話者コーパスとして『女性のことば・職場編』『男性のことば・職場編』（両者の出典はまとめて[職場]と表記）、『名大会話コーパス』（出典を表記する

際は[名大]と表記）を用いる。どれも日本語母語話者による自然談話を文字化した資料であり、以後この3つをまとめて『母語話者コーパス』と呼ぶ。学習者コーパスとして『KYコーパス』を用いた。出典は[英語中級]のように母語とOPIレベルを合わせて表記した。

表1 使用コーパス一覧

	コーパス名	出典の表記	収録時間
母語話者コーパス	『女性のことば・職場編』	[職場]	約21時間 (552分+728分)
	『男性のことば・職場編』		
	『名大会話コーパス』	[名大]	100時間
学習者コーパス	『KYコーパス』	例 [英語中級]	約41時間

表1は使用コーパスの一覧である。収録時間はそれぞれのコーパスに記されているものを基にしているが、『KYコーパス』についてはこちらで計算をした概数である。OPIデータが90人分収録されているので、初級レベルの15人はおよそ15分程度、中級以上の75人は30分程度と想定して計算したものである。

4.1 使役用例の収集

使役の用例を収集する際、難しいのは他動詞との区別である。生物使役については、以下の点に注意して元の形さえ復元できればすべて使役と判定した。

(6) 生物使役

- ・元の形が復元できるなら使役（野田1991）
‘寝かせる’は‘寝く’という元の形が作れないので他動詞
- ・元の形と意味が連続しているなら使役（野田1991）
‘(肩を)ふるわせる’は‘ふるう’と意味が連続しないから他動詞

2.2で論じたように、無生物使役については、他動詞との境界線が非常に引きにくいという認識から、(6)の点に注意して元の形が復元できても、その形式が他動詞として『広辞苑』に記載されているものは使役ではないという判断をしている。

(7) 無生物使役

- ・(6) の条件に合っても『広辞苑』に一単語として登録されていれば他動詞
他動詞の例：‘合わせる’ ‘知らせる’ ‘すませる’ ‘もたせる’

『母語話者コーパス』から以上の基準で集めた用例をまとめたものが以下の表になる。授受表現や受身が接続していないものを便宜上単独形式と呼ぶ。

表2 母語話者コーパスにおける使役

単独形式	使役+授受	使役受身	計
232	67	15	314

表にある使役+授受・使役受身といった複合形式は、「私がやらせていただきます」「私は歌わされた」のように必ずしも被使役者をヲ格・ニ格で表示するわけではないので、今回は分析の対象からははずす。

4.2 日本語母語話者の使用実態 (研究課題①)

『母語話者コーパス』から収集された単独形式の例は232例であった。このうち同一の節内に被使役者をヲ格で表示しているものが15、ニ格で表示しているものが34、計49例であった。その他の方法で被使役者を表示する例^[註7]が19例あったが、164例は被使役者を同一節内には表示していないことがわかる。

表3 被使役者の表示

ヲ格	ニ格	その他	表示なし	計
15	34	19	164	232

ここで3.3で提案した研究課題①が明らかになったが、日本語母語話者データにおいて被使役者をヲ格・ニ格で表示するのは232例中49例で21%である。他の方法で表示しているものを除いても、232例中164例の71%は被使役者を表示していないことになる。ここからは具体例を挙げながら、被使役者が表示されない理由について論じる。

- (8) なんか、ただ、カバみたいに〈笑い〉あの、嫁入りさせたら (うん) すぐ子供できるっていうタイプじゃなくて、(ああ、そうだねー) やっぱり好みとかがあるみたい。 [名大]
- (9) で、んでまたあと、えーっと、5番目、6番目の質問を読ませる [名大]

(8) の例は前の文脈で‘ゴリラ’の話をしており、ここでは被使役者‘ゴリラ’は主題化している(「ゴリラは」が復元可能)。この流れにおいて主題は明快で、わざわざ言わなくてもよい。また、(9) のように教育について語る文脈でよく使役が出てくるが、わざわざ言わなくても被使役者は‘学生’である。つまり主題化していなくても被使役者は非表示にできる。他にも、‘私’や‘話し相手’が被使役者の場合も言う必要はない。このように被使役者はしばしば文脈から明白であり、表示しなくてもわかる。

被使役者を表示しないということは、類型論的にも指摘されていることである。コムリー(1992)では形態的使役(日本語のように動詞に助動詞や接辞などを付加して使役を作るタイプ)では、被使役者の表現を変えることで使役表現が作られるとしている(「太郎が走る」→「次郎が太郎を走らせる」という被使役者の格が変化することを言っている)。そして、言語間で特によく見られる例として、被使役者の省略を挙げている。例はソンガイ語(西アフリカで用いられている言語)である。

- (10) Ali nga -ndi tasu di. アリが米を食べさせた。 (コムリー 1992: 188)

このように使役文で被使役者が省略されるという普遍的傾向があるのは、被使役者は文脈の助けがあればわかるから、という説明ができるのであろう。

4.3 日本語母語話者の使用実態 (研究課題②)

表4 ヲ格使役・ニ格使役の内訳

ヲ格使役 15	無生物使役 9	ニ格使役 34	強制 28
	誘発 5		許容 3
	許容 1		強制か許容か不明 3

ここでは実際に収集した用例を詳しく見てみたい。ヲ格で被使役者を表示していたものが15例であったが、それらをここに挙げる。人が人(生物)に働きかける生物使役は以下の6例のみである。

(11) 生物使役(例はすべて[名大])

- ・それなのにさ、あたしを心配させる
- ・そのそれがどのぐらい相手を納得させられるかっていうところに価値があるんだ
- ・こう、のりがよくなって、相手をのらせるタ、タイプの人だったらー
- ・「サン・トワ・マミー」はさ、お、男の人を失恋させたようだけど、本当は
- ・(ふーん) たぶんそのやり方で、(ふーん) みんなを怖がらせるながら
- ・デパートなんかにさ、子供服売り場の一角に、ほら、お母さんが子ども服見てて、(うん) 子どもを遊ばせておくっていう

最初の例である‘心配する’を見るとわかるように、‘私が彼を心配する’というように他動詞である。‘怖がる’も他動詞であるということからもヲ格使役は自動詞の文から作られるというルールは完全ではない。興味深いのは「子供を遊ばせる」という一番下の許容使役の例以外はすべて人間の感情・気持ちに関わる心理動詞が使われており、2.1で述べた誘発使役の例である。

残りの9例はすべて、以下のような無生物使役の例である。紙幅の都合で3例だけ挙げる。

(12) 無生物使役(例はすべて[名大])

- ・結局は(ええ)生成文法と(ええ)コグニティブ・グラマーを(ええ)ドッキングさせなきゃいけない
- ・それで脳を働かせるためにもたんぱく質を入れなきゃいけないとかさ
- ・だけど、それをもうちょっとアップさせようって思っても

一方、被使役者をニ格で表示している例は34例であった。すべて生物使役

である。圧倒的に多いのは、(13)のような強制使役で28例ある。また(13)の例は‘走る’という自動詞が使われているが、明らかに自動詞が使われている例は‘立たせ’‘日本語で話させ’‘立ち合わせ’と他にも3例見つかる。つまり、ニ格使役は必ず他動詞を用いているわけでもない。

(13) ほんとは、(うん) 弟子とかに走らせてんだけど、 [名大]

(14) こっちにいわせりゃ、あーじゃない、こーじゃない、調整取りきれなくなっちゃった [職場]

(15) 人におかわりさせりゃいいんだよ [職場]

(14)は明らかに許容の使役で、こういった例は3例あったが、(15)のように状況を深く見ないと強制か許容かが判断できない例も3例あった。

ここまでの議論をまとめると、そもそも被使役者は省略されるものであり、あえて言うとしたら、無生物・誘発使役はヲ格、強制・許容使役はニ格という使い分けがあることになる。2.2で指摘したとおり、無生物使役と誘発使役は、ヲ格しか取れない点で共通しており、ヲ格使役というのはヲ格しか取れないときにだけ出現すると言える。

4.4 日本語学への貢献

ここで研究課題から少しそれるが、4.2と4.3の議論を日本語学という文脈で捉え直してみたい。早津(2004)ではこれまでの使役研究を概観し、しばしば議論されてきた問題の1つとして被使役者の格の問題を挙げている。他動詞使役はニ格、自動詞使役はヲ格になるとしつつ、他動詞使役はカラ格も可能で、自動詞使役はニ格も可能であると指摘している。また、自動詞使役のヲ格・ニ格の使い分けは、「強制的で使役対象(本稿で言う被使役者)の意志を無視」と「非強制的で使役対象の意志を尊重」という対立で説明されてきたことを指摘している。

本稿のここまでの議論から使役研究についていくつか指摘できることがある。1点目は他動詞の使役についてである。本稿のデータでも基本的に自動詞はヲ格使役となっていたが、他動詞がヲ格使役になっているものもあった。(11)の「あたしを心配させる」「みんなを怖がらせる」である。これらは経験

者を主語に立てると「あたしがXを心配する」「みんながXを怖がる」となる。ここで、原因や動作主を主語にした事態把握を行いたい場合は、「Xがあたしを心配させる」「Xがみんなを怖がらせる」となり、元の文の目的語がそのまま主語になる。2.2で述べたように日本語の心理動詞はそもそも自動詞が多い。ただ、例外的に少数の他動詞があり、それらは使役で使うときも被使役者はヲ格で表示するということである。つまり心理動詞は自動詞であろうが他動詞であろうが使役にするときはヲ格を取るということになる。他動詞がヲ格を取りうるという議論は従来はなかったものであろう。

2点目は、自動詞使役における被使役者の格表示についてである。4.3で述べたように自動詞の使役にニ格が使われているものが4例見つかった。ここに例文を挙げる。

(16) 自動詞のニ格使役 (例文はすべて [名大])

- ・ほんとは、(うん) 弟子とかに走らせてんだけど、
- ・お友だちにあげる方に、立たせる
- ・話しかけて一、(うーん、うん) 向こうにも頑張って日本語で話させて一、
- ・何と、夫にね、立ち会わせるんだって、

これらはすべて、ヲ格を取ってもかまわない状況であるにもかかわらずニ格を取っている例である。すべて強制使役であることを考えれば、ニ格の選択が非強制的な使役になるという指摘は必ずしも当てはまらないことがわかる。また、4.3の例を見れば明らかのように、ヲ格使役というのは1例の許容使役を除くとヲ格しか取れない無生物・誘発使役であった。つまり強制的な使役表現を使いたいという動機がニ格の使用に関わっていると考えられる。何よりも、被使役者の格表示については、格助詞に何が付くかという議論の大前提として、少なくとも話し言葉においては被使役者が表示されないことが圧倒的に多いという事実を押さえておきたい。

4.5 日本語学習者の使用実態 (研究課題③)

『KYコーパス』から例文を収集する際、『母語話者コーパス』と同じ手続きで行い、57例集まった。そこから前後文脈に合わないもの(本人の意図と違うことが確認できる場合)を誤用とした。誤用例は全部で16例あり、そのうち2例を以下に記す。

- (17)・あー、わきます、〈ん〉 わかせて、水を、〈えーえー〉 あー、完全に、
正→わかして [韓国中級]
- ・わたしの、いえに、〈はい〉 あ、誰かあ、はいらせ、ました、は
正→誰かに入られた/誰が入った [英語中級]

16例の誤用の中で12例(75%)が以上のように、使役を使わなくてもいいのに、使役を使ったがために起こった誤用である^[註8]。使役の過剰使用による誤用はすでに市川(1997)でも指摘されている。

表5 KYコーパスにおける使役の出現数(誤用数)

	初級	中級	上級	超級	計
単独形式	0	7 (4)	19 (8)	10 (1)	36 (13)
使役+授受 使役受身	0	2 (1)	9 (1)	10 (1)	21 (3)
計	0	9 (5)	28 (9)	20 (2)	57 (16)

ここまでの分析同様、使役+授受・使役受身の例を除外して誤用例を外すと、23例になる。その中でヲ格・ニ格で被使役者を表示しているものをレベル別に表にしたものが以下の表6である。

表6 ヲ格・ニ格による被使役者の表示 (KYコーパス)

初級	中級	上級	超級	計
0	3 (3例中)	6 (11例中)	4 (9例中)	13 (23例中)
0%	100%	55%	44%	57%

例が少ないが、レベルが上がるごとに被使役者をヲ格・ニ格で表示する割合が減っていくことがわかる。日本語母語話者は21%だったことを考えると、学習者平均の57%はかなり多いことになる。少し例を見る。

- (18)・私にそうさせようとしたそうです [韓国上級]
・うん、学習者の、に聞かせてほしいと思います [英語上級]

4.2の母語話者会話では省略されていたような、言わなくてもわかる‘私’‘学習者’を明示的に述べている例が目につく。この議論は用例が少なすぎて結論は出せないが、超級話者になる指標の1つが被使役者の省略である可能性は指摘できるであろう。

5 考察と提案

研究課題①にあった、日本語母語話者による被使役者の格表示については、全体の21%のみをヲ格・ニ格で表していた。深田・大曾(2007)では『名大会話コーパス』の分析から「受身形は使役形の5倍以上使われている」と指摘されているように、使役は出現頻度が非常に低い。学習者の発話においても同様に、出現頻度が低いということを山内(2009)で指摘している。その中でも被使役者のヲ格・ニ格表示はさらに5分の1になることは注目すべき点である。それにもかかわらず、3.2で見たように教材での扱いは、被使役者の格表示に関するドリルに特化している。使役をどの程度教材で扱うべきか(または扱わないか)、格表示のドリルをどの程度扱うべきか、今後の教材作成に向けて、こういった議論が活発になされるべきであろう。

研究課題②の被使役者のヲ格・ニ格表示について、日本語母語話者は必ずしも自動詞・他動詞という指標を利用していないことが明らかになった。この被使役者の取る格助詞の問題は、4.4で紹介した早津(2004)にあったとおり、日本語学で早くから議論の対象となってきたテーマである。注目したいのは、日本語学では、自動詞はどちらでもよく他動詞はニ格が必要になると指摘しているものを、教科書作成に当たり、自動詞はヲ格・他動詞はニ格というルールの

簡略化を行っている点である。本来自動詞に関してはどちらを使っても構わないのである。

話し言葉限定であるが、4.3のデータによると強制・許容使役にはニ格を用い、無生物・誘発使役にはヲ格を用いると説明した方が実情に合う。そもそも現在、3.2で見たように無生物使役自体を教科書で全く扱っていないため、ヲ格使役の練習がどの程度必要なのかわからない。格表示の問題は、高橋・白川(2006)がすでに指摘しているように、‘を’の重複を避けるときには‘に’を使うといった助詞の一般ルールでも使い分けは十分可能であろう。学習者の負担を考えるなら、わざわざ自動詞・他動詞の区別、格助詞の区別を使役指導と絡めて行う必要はないと言える。

研究課題③にあった日本語母語者と日本語学習者の使用実態の比較では、被使役者をヲ格・ニ格で表示する割合が日本語学習者(57%)のほうが日本語母語話者(21%)より高いということであった。学習者のレベルが上がるにつれて、その割合が下がっていくのも興味深い点であった。ここでもう一点確認したいのは、表5を見ればわかるように中級・上級だけに絞ると37例中14例(38%)は誤用だということである。形態的なドリルに集中するのではなく、どういった場面で使役を用いるのかという指導をもう少し丁寧にすべきではないだろうか。

6 おわりに

初級教材における「偏り」が、必ずしも言語使用の実態には合わないことを指摘してきた。本稿の意図は教材製作者を批判するということにはない。教材の製作は様々な制約の中で行われるため、どうしても使用実態に合わない部分が出てくるものである。ただ、現在日本語の初級シラバスに対しては、庵(2009)、野田(編)(2005)、山内(2009)と多くの議論が提示され、見直しをする時期に来ているのではないだろうか。文法版の仕分け作業である。教科書間での「偏り」を指摘することで、初級シラバスを改めて見直すきっかけになり、初級再編の際の議論が提供できることを期待している。

もう一点、本稿で提案したかったのは、新しい文法研究の形態である。このような教材分析から見えてくる「偏り」というのは特に初級で多く存在するも

のであり、しばしば我々の思い込みなどが込められている。そこを突破口とした文法研究がもっとあっていいのではないだろうか。特に現場の日本語教育に関わっているものは、この手の「偏り」を日々感じているはずである。白川(2002)では教材分析をベースにした語学的研究がまだ少ないという指摘をしているが、本稿がその具体例の1つになるなら幸いである。

〈広島市立大学〉

〈使用コーパスについて〉

『女性のことば・職場編』『男性のことば・職場編』(『男性のことば(職場編)』付属のCDデータ 現代日本語研究会(編)2002)、『名大会話コーパス』(科研プロジェクト研究代表者:大曾美恵子)、『KYコーパス』(科研プロジェクト研究代表者:カッケンブッシュ寛子)を使用させていただいた。コーパス製作関係者には感謝申し上げます。

〈付記〉

本稿は「初級を軽くするー使役に関する考察ー」(2010年世界日本語教育大会〈台湾〉:森篤嗣氏との共同発表)、「使役における初級教材の「傾き」と使用実態」(第3回日本語/日本語教育研究会:岩田単独発表)を基に再構成したものである。研究発表、査読の過程で有益なコメントをくださった三宅知宏氏、庵功雄氏、前田直子氏、匿名の査読者他多くの皆様、またコーパス等の技術的な指導を行ってくれた森篤嗣氏に感謝申し上げます。

注

- [注1] …… 宮川(1989)ではこの無生物使役をブロックという、より一般的な言語現象により説明しており興味深い。
- [注2] …… 日本語記述文法研究会(編)(2009)でもここでいう両者の使役を原因的使役文・他動的使役文と呼び、どちらも「使役者が事態の成立に直接的に関与する使役文」という節に下位分類されている。
- [注3] …… 引用の際、必要に応じてI・IIなどの巻数を提示するが、全体として教科書を指すときにはこの表示のままを用いる。
- [注4] …… [JBP]はドリルはなくても解説に誘発使役が詳しく説明されている。
- [注5] …… 「先輩は後輩にボールを片付けさせます」「先生は生徒を走らせます」という例を提示して、それぞれの例文の下線にイラストベースの代入練習を行うものである。
- [注6] …… フリーソフトで、以下のアドレスからダウンロードが可能。
http://www.hi-hone.jp/jun_miura/jgprep.htm
- [注7] …… カラ格、取り立て助詞、無助詞などで被使役者を表す例も見つかっている。

[注8] …… ここでは「わかせて」の例のように誤形成の可能性のあるものも12例に含まれている。残りは「学習者に授業をやらせたい(正→聞かせたい)」のような語彙の選択ミスが3例、あと1例は目上に対する「知らせてあげる」であった。なお、市川(1997)で誤用扱っている無生物使役、誘発使役は本稿では2.1に述べたとおり使役の一種としており、誤用とみなしていない。

参考文献

- 庵功雄(2009)「地域日本語教育と日本語教育文法ー「やさしい日本語」という観点から」『人文・自然』3,pp.126-141. 一橋大学
- 市川保子(1997)『日本語誤用例文小辞典』凡人社
- 岩田一成(2011)「数量表現における初級教材の「傾き」と使用実態」庵功雄・森篤嗣(編)『日本語教育文法のための多様なアプローチ』pp.101-122. ひつじ出版
- 現代日本語研究会(編)(2002)『男性のことば(職場編)』ひつじ書房
- コムリー、バーナード(1992)『言語普遍性と言語類型論』松本克己・山本秀樹(訳)、ひつじ書房
- 白川博之(2002)「記述的研究と日本語教育」『日本語文法』2(2),pp.62-80. 日本語文法学会
- 高橋恵利子・白川博之(2006)「初級レベルにおける使役構文の扱いについて」『広島大学日本語教育研究』16,pp.25-31. 広島大学大学院教育学研究科日本語教育学講座
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会(編)(2009)『現代日本語文法②』くろしお出版
- 野田尚史(1991)『はじめての人の日本語文法』くろしお出版
- 野田尚史(編)(2005)『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版
- 早津恵美子(2004)「第5章 使役表現」尾上圭介(編)『朝倉日本語講座6 文法II』pp.128-150. 朝倉書店
- 板東美智子・松村宏美(2001)「第3章 心理動詞と心理形容詞」影山太郎(編)『日英対照動詞の意味と構文』pp.69-97. 大修館書店
- 深田淳・大曾美恵子(2007)「「茶漉」で見る日常会話」CASTEL-J 2007 Proceedings pp.125-128.
- 宮川繁(1989)「使役形と語彙部門」久野暉・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』pp.187-211. くろしお出版
- 森田良行(1995)『日本語の視点? ことばを創る日本人の発想』創拓社
- 山内博之(2009)『プロフィジェンシーから見た日本語教育文法』ひつじ書房